古屋×乙一×飛丸、自作を語る

実は深夜のファミレスでの雑談から生まれた本作『少年少女漂流記』。
この豪華コラボレーションを終え、ソロに戻った二人が、再び始まりの場所にやってきた。
あのとき、ここで交わされた会話とは？　今だからこそ明かす、創作の舞台裏。

⚠この対談は内容に言及しています。ネタバレにご注意ください！

未だ「中二病」の二人だから

古屋：久々のパーミヤンです（笑）。

乙一：僕も近々引っ越す予定なんで、ここに来るのは最後だと思います（笑）。ここを打ち合わせ場所にしたのは僕が自転車で来られるということもあって。古屋先生にはバイクで来ていただいてたんですよね。

古屋：だいたい夜の九時くらいから始めて深夜の二時くらいまでやってたからね。僕は足があるから、そっちに行くよって。初めてお会いしたのって二年前？

乙一：そうですね。映画『ＺＯＯ』の試写会で。

古屋：その時から「何か一緒につくりたいですね」という話はしていて。僕は『ＺＯＯ』では『陽だまりの詩』のキャラクターデザインと絵コンテをやったんですけど、乙一さんの原作を最初に読んだ時にこれは自分の漫画みたいだなって思ったんです。だから今回も乙一さんなら別に打ち合わせなしでいきなり原作を書いてもらうのでもよかった。だけど、せっかくこういう機会だから毎回話し合って決めるという形式をとったんですよね。

乙一：まっさらな状態で成り行き任せに。

古屋：七、八割が雑談で、だんだん核心に近づいていくというね。手順としては毎回ここで二人で話を出し合って、だいたいの流れというか起承転結まで決めて。それを乙一さんが持って帰って、一週間くらいでプロットに直したものをメールしてくれて、それを僕が漫画にしていった。最初は乙一さんは『銀河鉄道９９９』みたいな長編で考えてたんだよね？

乙一：そんな話してましたね。ちょうど僕がドラクエっぽい異世界ファンタジー面白そうだなって思っていた時期だったから。

古屋：僕も何も決めてなかったから、それもいいなと思ったんだけど、話してるうち伊集院光のラジオの話になって。そこから第一話が生まれるまではすごい速かった。

乙一：そうですね。二人とも伊集院さんのラジオが好きで。特にあの妄想のコーナー。

古屋：デビッド・リンチ占い（笑）。

乙一：そう。リスナーがデビッド・リンチ的な妄想をハガキに書いて送ってくるという、伊集院さんのラジオの中でもかなりコアなコーナーが好きだとわかって。

古屋：「中二病」って言葉があるじゃないですか。僕と乙一さんの共通点を挙げるとすると、そこなんじゃないかな。

乙一：最近ネットのニュースを見ていたら、「中二病」という言葉の提唱者は伊集院光で、ラジオで言われてた言葉が一般化しつつあるという記事でしたよ。

古屋：ありましたよね、中二病のコーナー。

乙一：ありました。

古屋：その辺がたぶんね、共通してる部分なんだろうな。「中二病」を言葉で説明するのは難しいんだけど……。

乙一：あの頃のようなちょっと馬鹿な。

古屋：なんかこう、満たされない思いを妄想で補っているような。

乙一：なんか自意識過剰みたいなね。ハタから見たらちょっとイタイんだけど、本人はすごい必死な感じというか。

古屋：僕も乙一さんもたぶんそういうものを引きずっているというか、そういう主人公を描くのが好きだという共通点がある。

乙一：僕がなぜ少年少女を描くのかと言えば、未熟で半熟卵みたいな状態なのがすごく魅力的で。まだ道に迷ってる状態で、どっちに向かうかわからない危うさみたいなのが描いてて楽しいんですよね。自分の十代の頃の鬱屈したものがトラウマとして残っていて、こういう作品にして昇華させようとしてるんじゃないのかなとも思うんですけど、もう完成した大人を描くよりもいろいろと妄想の入る余地があるような気がするんです。

古屋：僕が十代の少年少女を描く理由も、やっぱり似たような感じがあって。十代の子たちのあやふやなところ、あいまいで輪郭がハッキリしてないところが好きなんですよ。なんかぼんやりしてるんだよね、男の子にしても女の子にしても。伊集院さんのラジオっていうのはそういう二人の核心を突くところがあるんだろうね。

乙一：「デビッド・リンチ占い」という共通の完成形のイメージがつかめたのはやりやすかったですよね。短編形式で行けるというのも長編より気が楽だったし、いろんな妄想を出せるっていうのもありがたかった。妄想ならどんなビジュアルでもいいし。

古屋：妄想から最終的には現実の世界に戻ってくるというのも「デビッド・リンチ占い」のセオリーだった。それで僕が「水没した街が描きたい」という話をしたら、乙一さんが「じゃあ沈めちゃいましょう」と（笑）。すぐに第一話が出来ちゃった。

乙一：水没と聞いて、すごい身勝手にワクワクしましたね。僕が一番いい観客席で眺めてたんじゃないかなと思うんですけど、発想の段階から絵になっていく瞬間を目の当たりに出来たのが楽しかったです。

古屋：二人でこう決めていたんです。乙一さんは打ち合わせで話したことを全く無視しても構わないです。そのかわり僕もプロットを無視する可能性もありますよと。そのくらいユルい感じでしたよね。

乙一：ユルかったですね。第一話でいうと主人公の顔がないところとかは古屋先生が付け加えた場面で、僕のプロットにはなかった部分。そういう何か付け加えられたものを見るのも楽しかった。漫画っていう形式で語る方法みたいなのをそういうところで知って刺激になりました。

ネタ出しはイタイ思い出の告白になりがちで

古屋：ただ、少年少女が主人公のせいか、打ち合わせしてると、なんかお互いの十代の頃のイタイ話になっちゃうんだよね。女の子と待ち合わせする前の日に次の日の会話をきっちり想定していたとか。

乙一：相手のせりふまで（笑）。

古屋：そう。もうね、そういう予想がハズれた時のパニクりようときたら（笑）。それだけで話がひとつ出来ちゃうくらいのドラマがあると思うんです。第二話の『アリのせかい』はまさにそういう話で。この男の子の頭の中には絶対に別のシナリオがあったと思う。「アリってこんななんだよ」と言うと、彼女が「スゴ～イ」と驚くというようなね。でも現実はみんなから「キモ～イ」と言われてしまうという。

乙一：イタイ。

古屋：イタイよね。そもそも、これって、なんで蟻の話にしたんだっけ？

乙一：確か僕がアントクアリウムを持ってるって話をして。うちの蟻はほとんど全滅しかかってたんですけど、古屋先生はずっと以前に蟻の本を読んでいて、蟻の生態にすごく詳しかったんです。

古屋：ああ。上下巻の『蟻』という本ね。蟻の触角は一、二、三、四という節にわかれていて、節々のひとつひとつに所属や身分、年齢などの情報が入っていて、蟻と蟻は触角でお互いの情報を確認しあってるんですよ。蟻の賢いところは敵対する蟻を一匹捕まえてきて、そいつの触角の情報を自分の触角につけちゃうんだって。こすりつけて。それでそいつに化けて敵の巣穴にスパイとして入るんですよ。

乙一：スゴイよね。

古屋：スゴイ世界なんですよ、蟻の世界って。

乙一：それに僕は感動して。蟻の生態と教室の中を掛け合わせてみてはどうかって。

古屋：蟻のアントクアリウムが液晶モニターみたいになっていて、蟻文字が標準仕様で、蟻液晶みたいになってたら気持ち悪いだろうねって話をしたんですよね。

乙一：そうそう。蟻液晶。この話はだからビジュアルが凄いんですよ。「山岡さんがほつれてる」とか。蟻で出来てて。

古屋：「僕は僕蟻」とかね。そういう言葉の面白さもある回で。そういうアイデアを全部ミックスしていったんです。一話めが女の子が主人公だったんで二話めは男の子にして、これ以降、女、男、女、男って流れも出来ていった。

乙一：あと第二話の最後のページに「大型台風が発生」というのが出てきてますけど、これって最終話への伏線なんですよね。

古屋：確か乙一さんが「ラストは（映画の）『マグノリア』みたいな感じですかね」って話をしたんですよ。それで僕は家で『マグノリア』を観ていたら、この漫画のラストを思いついちゃって。どうか『マグノリア』が同じラストじゃあり

ませんようにって思いながら観てたので、カエルが降ってきた時には安心して。

乙一：安心したんですね。普通と違う（笑）。

古屋：うん。ああ、よかった、かぶらなくてと思って（笑）。ラストは竜巻でいきたいって思ってたからね。僕は子供の頃から竜巻に並々ならぬ愛着があって、紙さえあれば竜巻の絵ばかり描いていたんです。うわあっと竜巻を描いて、周りに人が飛んでて。お父さんとかお母さんとか先生とか、もう全部飛ばしてしまえっていう。

乙一：病んでますね（笑）。

古屋：とにかく竜巻の絵を描くのが楽しくてしょうがなかった。その記憶とうまくリンクして、ラストは竜巻でいこうって。だから第二話あたりで全体の流れみたいなのは二人の中でイメージ出来てたのかも。

乙一：でも次の第三話は結構難産でしたよね。まさか自分が魔女っ子ものを書くとは思わなかったし（笑）。

古屋：ここに来る途中、オモチャ屋の前でステッキが目に入ったんです。確かに難産だったけど、第三話は僕が乙一さんにびっくりさせられたというか、プロットの技術をすごい勉強させてもらいました。最初の打ち合わせでは主人公のサキちゃんが単独で自分を六歳の魔女っ子だって勝手に思い込んでるだけの話だった。

乙一：でもそれだとうまくプロットが書けなくって。その理由を考えたら、一話めと二話めは自分の外側に妄想があるんだけど、三話めは自分自身が妄想で。主人公視点だとその状況がうまく表現しづらくて、ちょっと他の視点をとりいれなくちゃいけなくなったんです。

古屋：それで乙一さんは第三者として香織ちゃんって子を立ててきて。さすがだなと思いましたね。その先は僕の方がまたかなりの難産で。香織という子を主人公の元親友だったという設定に変えたり、主人公のために闘うっていうクライマックスを僕の方で付け加えたりしました。だから打ち合わせからプロット、プロットから漫画の段階でかなりの変化が生じた回ですよね。

乙一：でもおかげで周囲ではすごい評判がよかったんですよ。

古屋：いい話になりましたよね（笑）。魔女っ子って一時ブームになりませんでした？

乙一：今も流行ってますよ。僕も実家に帰る度に姪のために『ふたりはプリキュア』のグッズを買って帰ってます。姪の発言がまた面白くて。四歳くらいなんですが、本気で「私も空を飛びたい」って言ってますからね。

古屋：この話を描いた時に、僕のアシスタントの女の子も言ってましたよ。子供の頃は確実に日曜日の午前中だけ空を飛べたんだって。二階の階段の上に座って、ぼーっとしていると、すーって飛んで下に降りてたって。

乙一：ミクシィでもそういう書き込みを見ましたよ。

古屋：ああ。彼女も書き込んだって言ってたから、たぶんそ

れを読んだんじゃない？

乙一：なるほど。

古屋：打ち合わせで、もしこういう話になってたら「日曜の午前中だけ飛べる話」をつくっていたかもしれないですね。

乙一：いいですね。時間限定超能力もの。

古屋：でも周りからは嘘つき呼ばわりされるという。なんかこういう話してると、まだまだいくらでも描けそうだよね（笑）。

元妄想家だった僕たちから少年少女に伝えたいこと

乙一：第四話の『学校の中枢』は、どういう流れで生まれた話でしたっけ？

古屋：乙一さんが学校の中枢で何かが操ってるって話はどうでしょうと言いだして。

乙一：覚えてない（笑）。

古屋：それで僕が『銀河鉄道999』のラストの話をしたんですよ。

乙一：それは覚えてます。

古屋：鉄郎はネジにされるために旅をしていたんだよという話を乙一さんは知らなかったんですよね。

乙一：ああ。すごいショックでした。

古屋：だから五ページめで主人公の彼はちゃんと『999』を読んでるんですよ。

乙一：ほんとだ。気がつかなかった（笑）。思い出した。この回は前の魔女っ子の話がいい話系だったので、僕は何か『ネジ式』みたいな、ああいう悪夢のような変な世界の話をやれたらいいなと考えてたんです。

古屋：あとは僕の同級生で常にタイルのマス目を数えて歩く子がいて。そこが何百何十個めだと納得して初めてその次に行ける、そういうちょっとこだわりの強い子の話をとりいれて。特に廊下の市松模様みたいなのってそういう妄想をかきたてるんですよ。

乙一：この市松模様って塗ったんですか？

古屋：これはね、CGなんです。

乙一：CGなんだ。スゴイな。先生が振り返ったらボンコツなロボットだったり、ネジが手にかみついてきたり、ビジュアルもちょっと狂っていて、この回は全体的に変な空気が流れてるのが僕にはヒットでした。

古屋：僕もこの回は妙に好きですね。「黒いタイルしか踏めない僕が根本的に不利だ」とか言葉遣いも『ネジ式』を意識したところがあります。不条理という部分でね。あと諸星大二郎先生の『不安の立像』とか。話の中で親友だった小島君と合作した『戦場の虹』という漫画が出てきますけど、あれも僕の体験談で。小島君って戦争オタクな友達がいたんですよ。ナントカ式の戦車とか史実を交えて漫画を描くんだけど、僕には戦車も歴史もわからなくって、最後は虹でおさめたんです。〝戦争は終わった、虹は美しかった〟。それで『戦

場の虹』。

乙一：すごい裏話だ（笑）。

古屋：次の『お菓子帝国』。打ち合わせの時、僕がダイエット中だった（笑）。パーミヤンの隣の席では小太りの親子がうまそうにフライとかを食べてて、非常に苦しい思いをした中から生まれた漫画ですね。

乙一：僕も昔ダイエットをしたことがあったんですよね。

古屋：それがまた泣かせる話でね。

乙一：僕の場合はすごい肥満児の中学生だったんですけど、体育の緑色のジャージを着て延々縄跳びをしていたんです。人に見られるのが恥ずかしくて、誰かが通りかかると、さっと植え込みに隠れたりしながら。

古屋：もう、その時の乙一さんをヨシヨシしてあげたいよ（笑）。

乙一：でも『お菓子帝国』は明るくてさわやかな話ですよね。後味もいいし。お菓子と闘うという馬鹿馬鹿しさがいいんですよ。八幡（やはた）なんていかにもエイリアンだし。

古屋：ああいうのはね、全部うちのアシスタントが資料も見ないで描いたんです。普通資料が要るでしょう？　どんだけお菓子が好きなんだっていう。「接敵」とか出てくるのは打ち合わせ中に雑談で『エヴァンゲリオン』の話をしたせいですね（笑）。

乙一：それにしてもキャラクターがカワイイ女の子の状態から太った状態になるというのは、やっぱりショックなもので

すね。

古屋：僕がそれを最初に思ったのは『バタアシ金魚』を読んだ時でした。あれもソノコ君が太っちゃうんですよ、ラストで。あと、この話の主人公の麻美と高畑君って名前は『エスパー魔美』から来ています。第六話『モンスターエンジン』には今日着ているバイクのTシャツにちなんだ面白い話があるんだよね。どうぞ説明を。

乙一：ちょうどそこの窓際の席でしたよね。打ち合わせをしていたら、すぐ前の通りを通った人が僕と全く同じ色の全く同じTシャツを着ていて。通行人のその人と僕の目があって「これ？　あ、同じシャツ、同じシャツ」っていう感じで相槌をして、そのまま歩き去ったという。そんなほんの数十秒の出会いと別れがありました（笑）。

古屋：その後、僕も買ったんです、このバイクのシャツを。

乙一：それでバイクの話になりました。

古屋：その後、乙一さんが「ザ　モンスターエンジン」というサイトを教えてくれて。子供の描いた化け物をそのまま絵にしている画家のサイトなんですけど、じゃあ、子供の頃の落書きが動きだすって話はどうだろうと。

乙一：ちょうど、これまで二人が書いたことないものをやってみたいねって言ってて。それでヤンキーものになったんですよね。

古屋：僕の同級生にヤンキーの子がいてね。小学校の時は仲がよかったんだけど、中学でその子は誰もが一目置くような

怖いヤンキーになっちゃった。それが名倉君っていう子で。でも僕には「ツヨシ君（古屋本名）、漫画描いてる？」みたいに声をかけてくれて、それで僕は守られてたというか、いじめられずに済んだという思い出があるんです。

乙一：いい話だなあと思って。プロットを書く時には『銀河鉄道の夜』をイメージした記憶があります。

古屋：「カンパネルラ、僕、寂しいよ」って感じですよね。現実の名倉君は生きてますが（笑）。僕も不良に憧れてたんですよ。リーゼントとか似合わなかったんで、なれなかったけど。乙一さんは？

乙一：僕は絶対ヤンキーに目をつけられないようにひっそりと生きてましたね。一応小説家デビューはしてたんですけど、クラスの人に知られたら学校に行けないと思って必死で隠し通してました。ずっと友達がいなかったんですよ。友達がいなかったから小説を書いてたところがあって。小説でデビューして、そういう風にしらをきり通すことが始まると、やっぱり心の壁みたいなのが余計厚くなった気がしてね。これはダメだなと卒業する時に思ったんです。それで大学ではSF研究会に入って、サークルの人たちには打ち明けて、それで話す人とかもできて。まあ、そこはSFとは全然関係ない、テーブルトークRPGというゲームのサークルだったんですけどね。

古屋：オタクっぽかったんだね。

乙一：オタクオタク。小学生の頃とかゲームソフトって高いじゃないですか。それで攻略本を買って脳内でプレイしてましたから。でも今思うと、それが小説のプロットを考えるのに役に立っている気がします。

古屋：僕はひとりっ子だったから、やっぱり妄想がその穴を埋める手段になってましたね。まして家が山の中だったから近くに本屋もないし遊ぶ場所もない。小学校に行く時にね、木に名前をつけてたんです。

乙一：それはスゴイな。

古屋：なんかね、そういう少年期のじくじくした思いから来る妄想みたいなものをここまで描いた漫画ってこれまであまり見たことないような気がしませんか？

乙一：確かに妄想をここまで壮大にビジュアル化してるのはなかったですよね。

古屋：そういう時期って、当然こんな状態から早く抜け出したいし、苦しい。でも元妄想家だった僕たち二人から、そういう今の少年少女たちに「それでいいんだよ」と言ってあげたいよねって話をしたんですよね。また伊集院さんのラジオの話になっちゃうんだけど。

乙一：「自虐の詩」というコーナーですよね。リスナーが過去のいろんなトラウマを書いて「伊集院さん、こんな僕は果して大丈夫ですか」と聞くんですけど、どんなトラウマであっても伊集院さんは「大丈夫です。それでいいんです」みたいに最後は言ってくれて。僕もすごい救われました。

古屋：だから今度は僕たちがこの漫画で少年少女たちに「い

いんです。大丈夫です」って言ってあげたかったんですよ。

コラボレーションを終えて

乙一：第七話は『青嵐様を見つけたら』。この青嵐という漢字とラストの竜巻が符合したのは偶然なんですか？

古屋：偶然。そういえばこういう面白い漢字があるんだよというのはこの打ち合わせで初めて思い出したんだから。

乙一：それは使うしかないですね（笑）。

古屋：偶然なのにまるで練りに練られたよう（笑）。青嵐という漢字通りの三つの竜、三つの雲に乗った妄想が少女の前に現れる。現実が辛いから妄想に逃げちゃうという話で女の子特有ですよね、キャラに恋しちゃうというのは。そういうウットリ力って女の子の妄想の原点かも知れない。

乙一：漢字からいろんなこと妄想しちゃう女の子の話なので、難読名字辞典みたいなもので実際にある漢字を作品に使ったのも楽しかったです。

古屋：ここからはいよいよラストに向けての助走という感じになっていくので、竜巻を主題に逆算していって。さてどうしようかという時に、乙一さんがばそっと「竜巻を飼うというのはどうでしょう」と。僕あの瞬間「これが乙一か！」って思った。スゴイと。あのひと言で決まりましたね。飼うってことは『のび太の恐竜』だよね、第八話はちっちゃい竜巻を拾って大きくなる話にしようと。

乙一：それと並行してラストで竜巻の中でホームルームを開きたいって話を古屋先生がしていて。それで第八話の泰斗君はホームルームオタクな委員長になった。

古屋：『真剣10代しゃべり場』（十代の青少年が熱く語る討論番組）っぽい感じのね。

乙一：僕はあの番組をちらっとテレビで観ると、あそこに出て誰かに言葉でヘコまされてる自分を想像して悲しくなるんです。この作品って出てくる男の子がみんな、弱者なんですよね。強い側に回れない。その辺も僕と古屋先生の共通点が出ちゃってるような気がします。

古屋：彼のイタさの表現として「伊集院光のラジオ聴いてそう」ってあって、それってまさに僕たちのことだしね（笑）。

乙一：内弁慶で家庭内暴力を竜巻のせいにしてるのもイタイ。

古屋：「そ、それでは、ぼ、僕を学級委員から外したいと思う人は手を上げて下さい」ってセリフもイタすぎて、これは竜巻もおっきくなっちゃうわという。

乙一：竜巻を川に流して遠ざかっていく感じがまたばかばかしくて、感動的でしたね。

古屋：僕は川の柄げたの下っていうものにものすごく思い入れがあるんですよ。それで結構頻繁に作中に出しちゃうんですけど。

乙一：僕もめちゃめちゃ思い入れあります。

古屋：そうなの？

乙一：僕は高専に通ってた四年生の時に、工場実習というのに行かなくちゃいけなくて、一週間だけ工場に通ったんですよ。でも工場でもやっぱり誰ともしゃべれなくて。一緒にその工場に実習しに行ったのが僕ともう一人だけで、その人は周りと打ち解けてるのに僕はずっと片隅にいて。お昼休みはいたたまれなくて、工場のそばの橋の下でぼーっと暇をつぶしてたんです。

古屋：泣ける。僕も今でもたまに多摩川の橋の下とか思い出したように行きたくなっちゃうんですよね。一番最初にエロ本見たのも僕は川原ですもん。あとは近所のダンプの修理工場の倉庫の中とかね。油まみれの歯車とかがいっぱいある中にエロ本が捨ててあって。だから油の匂いと歯車とか機械とエロが僕の中では密接に結びついていますね。

乙一：そんないい思い出があってうらやましい（笑）。

古屋：最終話は川に流した竜巻が大きくなって戻ってきて、東京をぶちこわして回るんだけど、もう、現実か妄想かわかんないような外れ方をしていくんですよね。

乙一：たどりついてよかったですよね。妄想が現実を浸食した感じが僕は好きですね。竜巻の中に教室が浮かんでるというビジュアルもなんか美しくて。これまでずっと妄想の話だったのが竜巻だけは現実で、街のみんなが見上げてるっていうのもすごい印象的でした。ただ、最終話でいきなりネームを書くことになったのは困りましたけど。

古屋：そしたら乙一さんがほとんど文章を書かないで漫画のネームを描いてきてくれて。じゃあっていうんで、僕が文章をつけ足したりして。最後は役割の境界線を越えた、本当にコラボレーションでしたよね。

乙一：ビジュアルで物語る勉強をすごいさせてもらった感じがします。

古屋：僕も乙一さんとの掛け合いでつくっていったので、意外な方向から化学変化が起こって、自分一人では行けない場所に行けたと思います。自分の体験談も結構入ってるので、そういう意味でも思い入れの深い作品になりました。やっぱりね、過去の自分に「大丈夫だよ」と言ってあげたいというのが僕にも乙一さんにもあったんじゃないかな。乙一さんにしても十代の頃には友達もいなくって、でも今は無事に結婚もされたし、大丈夫だよってあの頃の自分に言ってあげたいっていうね（笑）。

乙一：ほんとそうですよ（笑）。

古屋：自分の自意識の大きさと存在のちっぽけさとの折り合いがつかなかったあの頃の少年少女たちに「大丈夫だよ。嵐は通り過ぎるから」と言ってあげたくて、この作品が生まれたという気がしています。

（構成／瀧晴巳）

古屋兎丸（ふるや・うさまる）
一九六八年生まれ。漫画家。
多摩美術大学美術学部卒業。九四年「月刊ガロ」にてデビュー。
著作に「Ｐａｌｅｐｏｌｉ」「ショートカッツ」「Ｇａｒｄｅｎ」
「Ｍａｒｉｅの爽やでる童楽」「ＸＹＺＹ」「ライチ☆光クラブ」
「彼女を守る51の方法」他多数。

乙一（おついち）
一九七八年生まれ。小説家。
九六年「夏と花火と私の死体」で、
第六回ジャンプ小説・ノンフィクション大賞を受賞しデビュー。
著作に「暗黒童話」「ＺＯＯ１」「ＺＯＯ２」（以上集英社文庫）、
「ＧＯＴＨ」「失はれる物語」「銃とチョコレート」他多数。

少年少女漂流記

〇〇七年二月二八日　第一刷発行

著者　古屋×乙一×兎丸

装丁　ｃｈｕｔｔｌｅ

発行者　加藤　潤
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二-五-一〇　〒一〇八-〇五〇
電話　〇三-三二三〇-六一〇〇（編集部）
〇三-三二三〇-六三九三（販売部）
〇三-三二三〇-六〇八〇（読者係）

印刷所・製本所　凸版印刷株式会社

©2007 Furuya×Otsuichi×Usamaru Printed in Japan
ISBN978-4-08-774854-3　C0979

定価はケースに表示してあります。

造本には十分注意しておりますが、
乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。
購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。
但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、
法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。